職員会議（４月１日（金））　校長より

◎ともに湯の岳を仰ぎ見る、さはこの丘（本校舎）とあかさかの丘（遠野校舎）から、いわきの高校教育に新しい風（いわき湯本高校）を吹かせたい！

⇒“ありがとう”と言える・言ってもらえる「新しい学校づくり」を通して、校訓の「自立・友愛・創造」（資質・能力）を身につけ、地域を支える核となって活躍する、社会で貢献できる人材を育て、一人一人の夢の実現「新しい自分づくり」につなげたい

１　“ありがとう”（校訓「自立」「友愛」「創造」（育成したい資質・能力）を表す魔法の言葉）

（１）“ありがとう”と言える
・感謝、思いやり、協働する力、人間関係形成力、「友愛」

（２）“ありがとう”と言ってもらえる
・挑戦、「努力」、「勇気」、「創造」

（３）“ありがとう”と言える・言ってもらえる
・「夢」、「自立」

２　“地域”とともにある学校（生徒・教職員・学校の根っこ）

（１）常磐・遠野・田人地区を中心としたいわき・浜通り・福島県

（２）湯本（８０年）も遠野（７４年）も地域の深い愛情と大きな期待によって支えられながら、地域を愛し、地域に愛され、地域を支える人を育ててきたという伝統⇒いわき湯本（０年）もそうありたい

（３）地域を学びのフィールド（教材、もう一つの学校）とする体験・探究型の学習など⇒地域で「自立」「友愛」「創造」（資質・能力）を身につける

３　学校づくりは自分づくりというプロジェクト

（１）いわき湯本高校という新しい学校に「変わる」「生まれ変わる」のではなく、新しい学校を「つくる」⇒「ゼロから」つくるのではなく、「これまでのよき伝統・実績、熱い思いを生かしながら」新しい学校をつくる

（２）「これまでの自分をよりよくする」ことは、「新しい学校の伝統・歴史をつくる」ことにつながる

（３）学校づくりという「チャンス」を生かすことによって、それまで気づかなかった自分の「新たな可能性」を発見し、磨き上げ、成長する⇒新しい学校をつくることを通して、新しい自分をつくるというプロジェクト

（４）「いわき湯本ならでは」の教育をつくる（コース制導入や県教委の教育プログラム（保健・医療コース）指定校など、新しい取り組み）

４　教師の中核の仕事は授業

（１）教師としての原点・基本

〇学校とは大人と子どもの文化的格差を前提としており、それを誰よりもうまく埋めることができるのが私たち教師。「先生」と呼ばれる私たちにとって、最も大切にしなければならないのは授業。

〇私たちは、生徒の力を伸ばしたい、成長させたいという思いを持って教師になり、一時間一時間の授業にさまざまな工夫や努力を重ねている。

〇これまでの一人一人の教育実践を生かして、磨きをかけて、生徒の成長・「自立」につながるような「質の高い授業」を、「友愛」の心を持って、ともに「創造」していきたい。

（２）「教科・科目」と「総合的な探究の時間」

〇教えるべきことはしっかり教え、できないことは少しでもできるようにする。

〇併せて、一方通行の画一的な授業から、の個別最適化された学び、協働的な学び、探究的な学びへと「学びの変革」を推進する。（観点別評価、一人一台端末など）

〇「探究」において、「各教科・科目」で身につけた、知識・技能、思考・判断・表現力等、学びに向かう力などを生かし・つなげ・深める。

〇一方で、「探究」の過程で生じた新たな疑問や問いをもとに「各教科・科目」の学びに戻っていく。

５　「両立」「バランス」と「リスク・マネジメント」

（１）二兎を追う者だけが二兎を得る

〇生徒指導・支援なくして学習指導・支援なし、学習指導・支援なくして生徒指導・支援なし（厳しくて優しい、鍛えられるが楽しい、指導と支援）

〇学習に力を入れたい、部活動をがんばりたい、そんな自分の得意を伸ばせます！（勉強と部活動・委員会活動、授業と学校行事、教育課程と教育課程外）

〇いわき湯本高校は大学進学から就職まであらゆる生徒の進路の実現を目指します（進学と就職、学力向上と進路意識）

〇校舎方式と統合校（本校舎と遠野校舎それぞれ独自の教育活動を展開（校舎方式）しながら、「統合校」としてのまとまり・統一性・一体感を醸成）

〇チームとしての学校（部・学年・教科・委員会等、教員と事務職員、学校と外部の関係機関）

〇ワークライフバランス（生徒も先生も大事、仕事もプライベートも大切）

〇感染症対策を徹底しながら、教育活動を保障（学びを止めない）

（２）二兎を追う者は一兎をも得ず⇒「リスク・マネジメント」

〇悲観的に準備し、楽観的に実行する、最悪を想定し、最善を目指す

〇ダメージを最小限に抑え、守るべきものは守る

〇無限保障ではなく限定保障で